待ちました60年

忠犬ハチ公まつり

胸像の主人とご対面

――無言の出会いに日元ほころぶ？

帰らぬ主人を渋谷駅頭で待ち続け、銅像となって今に残っている忠犬ハチ公。八日、同駅北口広場にある銅像前で「忠犬ハチ公まつり」が開かれたが、今年は銅像が建立されちょうど五十周年とあって、ハチ公が待ち続けた飼い主の胸像との対面も行われた。主人がこの世からいなくなってから六十年ぶりの出会い、という愚問。戦前は軍国主義教育の教材に使われ、戦後はデートの待ち合わせの目印に。この半世紀の変遷を、ハチ公はどう見ているだろう。

飼い主の上野英三郎博士の胸像と対面を果たしたハチ公　＝渋谷駅前で

ハチ公は秋田県大館市で産まれた秋田犬。大正十三年に渋谷区松濤に住む東京帝大教授上野英三郎博士にもらわれ、以来、博士を渋谷駅に送り迎えするのが日課となった。博士は大正十四年五月に大学で急死したが、ハチ公はその帰りを待って渋谷駅に通い続けた。その話が広まり、当時の修身の教科書にも「恩を忘れるな」の題でとり上げられ、「忠犬ハチ公」は全国に知れ渡った。募金で銅像が建立されたのが昭和九年四月。そしてハチ公は十年三月に病死した。

銅像は戦時中、金属回収で鋳つぶされたが、二十三年に再建され、毎年四月にハチ公まつりが行われている。

故上野博士は現在の東大農学部農業工学科の創設者で、文京区弥生の同学部四号館には同博士の胸像が置かれている。この日は慰霊祭の後、胸像がハチ公像の前に運ばれてご対面。「六十年ぶりの無言の対面です。心なしか、口元がほころんだような……」と司会者が雰囲気を盛り上げた。

胸像とハチ公像の対面を企画したのは同学科四年の北川俊幸さん(三つ)ら。昨年の五月祭の出し物として、胸像をミコシにして渋谷に繰り出し、「ゴタ・ーイメーン」とやるつもりだった。背にハチ公の顔を描いたハッピも用意したが渋谷署から待ったがかかり中止、折角の企画だから、とハチ公まつりを主催している銅像維持会(並木卓人会長)に持ち込み、この日の対面となった。「もっと暖い調子でやるつもりだったんですがね」と学生たち。

ハチ公まつりは地元選出の代議士や区議会議長、秋田県大館市長、渋谷駅長らが出席し、秋田犬の展示も行われた。あいさつでは「ハチ公が亡くなられて五十年、心の豊かさが求められる今こそ、ハチ公像の意義は大きい」「心を忘れ勝ちな現在、ハチ公に笑われないように」。いきさつ大げさなハチ公礼賛が続いた。

ハチ公は両前足とシッポがピカピカに光っている。待ち合わせの人々が手で触れ磨いているためだ。式典の間、駅前広場には、待ち合わせの目印に近寄れない人々の当惑顔が目立った。